



“革命をしたかった。”



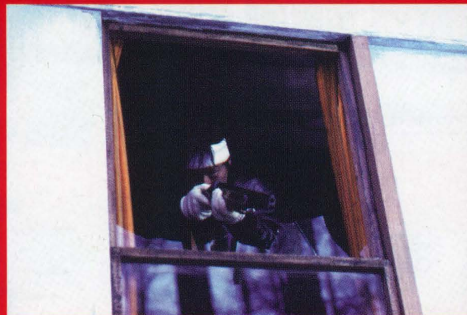
革命を夢見た20代の若者たちは、なぜ、14名の同志を殺してしまったのか……？

光の雨

1972年・連合赤軍事件、衝撃の初映画化



『おまえに総括を求める！』
『おまえは死刑や。それが中央委員会の決定や』



『異議なし！』
『私は総括できる、
総括して革命戦士になりたい…』

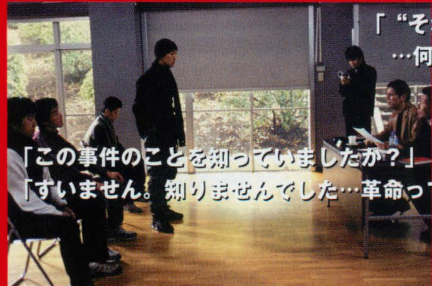
革命とは…？ 総括とは…？ 「連合赤軍」とは…？

映画『光の雨』は、「あの時代」を描いた作品ではない。同名の原作を映画化しようとする「今の時代」を生きる人々の物語である。
若手映画監督・阿南(萩原聖人)は、映画のメイキングの撮影を依頼される。連合赤軍による同志リンチ事件を描いた小説『光の雨』を映画化する企画で、CMディレクター・樽見(大杉漣)の初監督作品だという。キャスティングされた20名以上の若手俳優たちは、30年前に実在した同年代の若者たちの行動に疑問を感じながらも、それぞれの「役」を演じようと試みる。だがある日、樽見監督は現場から突然姿を消してしまう。果たして映画は完成するのだろうか？ 若手俳優たちは「事件」の当事者たちの「心の闇」に触れることができるのだろうか？

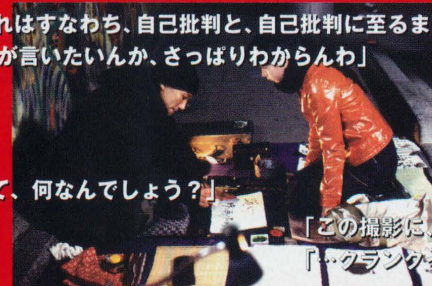
戦後昭和史の最大の闇=1972年・連合赤軍事件、衝撃の初映画化。30年の時を経て遂に描かれる衝撃的な場面の連続に、見る者は一瞬も目を離

すことが出来ない。また、小説の映画化を劇中劇として描くという野心的な構成により、フィクションとドキュメンタリーの最良の要素が結実。今の時代を生きる役者たちの苦悩や葛藤をもとにした「青春群像劇」であると同時に、一本の映画が完成するまでの「内幕もの」としても興味深い。
監督は、自ら同年代を体験した鬼才・高橋伴明。「連赤事件を撮り終えないと自分の21世紀は始まらない」との思いから、まさに自身のキャリアを総括する渾身の一作となった。キャストには、初期高橋作品から出演を続ける「時代の代弁者」大杉漣、撮影現場の空気を抜群の説得力で伝える萩原聖人の2人を軸に、若手実力派が「革命の子供たち」として集結。特に幹部を演じる山本太郎・裕木奈江・池内万作の、役柄を冷静に見据えながら狂気へと迫ってゆく演技は必見だ。
不況が日常化し不安や恐怖ばかりが増大する現代社会……なぜ、人を殺してはいけないのか？と問われる世の中……だからこそ作られた本作品は、今という時代を生きる全ての世代に向けられた“衝撃的感動作品”である。

「革命という夢をみながら、現実の悪夢に陥った空間。現代というフィルターを通しつつも、心の闇の恐ろしさを描いた傑作」 藤原ヒロシ(音楽プロデューサー)



「この事件のことを知っていましたか？」
「すみません。知りませんでした…革命って、何なんでしょう？」



「それはすなわち、自己批判と、自己批判に至るまでの相互批判である」
…何が言いたいのか、さっぱりわからんわ」



「この撮影に、終わりの日は来るのか…？」
「…クランクインした映画は、いつか終わります」

萩原聖人 裕木奈江 山本太郎
池内万作 鳥羽潤 小嶺麗奈 * 板谷由夏 西守正樹 山中聡 松田直樹
一條俊 大柴邦彦 西山蘭子 蟹江一平 近藤大介 矢澤庸 関川侑希 玄覚悠子 佐藤貢三 大和屋ソセキ 三上大和 恩田括 金子貴俊 白石朋也
高橋かおり 川越美和 金山一彦 ** 塩見三省 大杉漣
高橋伴明監督作品 原作: 立松和平(『光の雨』新潮文庫刊)
製作総指揮: 高橋紀成 製作: 遠藤秀佐 石川富康 プロデューサー+脚本: 青島武, プロデューサー: 森重晃 音楽: 梅林茂 撮影: 柴山高秀 照明: 渡部嘉 録音: 福田伸
美術: 金勝浩一 編集: 菊池純一 スクリプター: 津崎昭子 助監督: 瀧本智行 製作担当: 小川勝広 劇中短歌: 福島泰樹 筆文字パフォーマンス: 軌保博光
2001年 130分 VHSスタ1:1.85 ステレオ 製作: シー・アイ・エー, エルクインフィニティ, 衛星劇場 配給: シネカノン <http://www.cqcn.co.jp>



12月中旬お正月第一弾ロードショー

①10:50 ②1:30 ③4:10 ④6:50 【入替制】 ※12/31最終回休映 ※1/1(元旦)休館

Best Price! 前売券¥1200発売中(当日:一般大高¥1300, 中小シニア¥1000)
劇場窓口(先着限定でポストカード付)、ぴあ、ローソン、市内プレイガイドにてお求め下さい。

パラダイスシネマ
心斎橋アメリカ村BIG STEP 4F
06(6282)1460

